

僕のかきの木

小川未明

青空文庫

もう、五、六年ねんまえ前のことであります。

ある日、賢吉けんきちは、友だちが、前まえ畑はたけの中なかで遊あそんでいる姿すがたを見つけたから、自分じぶんもいつしよに遊あそぼうと思おもつて、飛とんでいきま
した。

「清せいちゃん、なにをしているの。」と、立たち止どまつて、声こえをかけ
ると、

「赤あかがえるを見みつけているの、君きみもおいでよ。」と、清せい次じが、答こた
えました。賢吉けんきちは、みようが畑はたけの中なかへ入はいりました。

「赤あかがえるをつかまえて、どうするの。」と、賢吉けんきちは、聞ききま
した。

「安田のおばあさんが、とくちやんに食べさせるのだから、つかまえてくれといったのだ。」

「とくちやんが食べると、鼻の下の赤いのがなおるから？」と、賢吉が、聞きました。

「きつと、そうなんだよ。さつき、一ぴき見つけたけれど、どこかへ逃げてしまった。」

「そのかえるは、真つ赤だった？」

「そんなに赤くなかった。」といいながら、清次は、みょうがの葉を分けて、下をのぞいていました。みょうがの子が、柔らかな黒土から、うす赤い頭を出して、白い花を咲いているのでありました。

「賢ちゃん、ここに、こんなかきの木が生えているよ。」と、突
 つぜん、清次が、いいました。

賢吉は、そのそばへいつてみると、かきの木の苗が、みよう
 が畑の端の方に一本生い出て、大きな葉をつやつやさしています。
 そこから、五、六間はなれたところに、太い親のかきの木が、
 立っていました。幾十年となく雨風にさらされてきたので、肌
 が荒れて、枝は、曲がりくねっていました。甘がきで、秋になる
 と、実の上に白い粉をふいて、枝の先にいるいとしてみごとに
 たれさがるのでした。

「清ちゃん、あの木の子だね。」

「甘がきだよ。賢ちゃんにあげるから、持っていて植えておき

よ。」

清次は、力いっぱいにその木を引つ張りました。すると、根は、深く入っていたとみえて根本から一、二寸、下のところで、ぽきりと切れてしまいました。

「あつ、切れてしまった。」

「惜しいことをしたね。」

「こんな、きんぼ根ではつかないね。」といって、清次は、畑の外へ、その若木を捨ててしまったのです。

賢吉は、じつとそれを見ていましたが、このまま枯らしてしまふのをかわいそうに思いました。また、助けて、つくものとすれば、神さまに対して、すまないことであると感じたのです。賢

吉は、走つて行って、拾い上げました。

「清ちゃん、僕、この木をもらつていてもいいの。」と、聞き
ました。

「賢ちゃん、うまくすれば、つくかもしれないよ。」と、清次は、
自分が、手荒にしたのをべつに後悔するふうもなかつたのです。

賢吉は、往來を歩いて、日に照らされながら家へ帰ると、
この傷のついたかきの木の苗をどこへ植えたらいいかと考えまし
た。

「そうだ、お父さんに、相談してみよう。」と、思いました。
父は、きつと考えてくれるだろうと思つたからです。

賢吉は、お父さんを呼びました。あちらで仕事をなさつてい

たお父^{とう}さんは、なんだろうと思^{おも}つて出^でてこられました。

「甘^{あま}い、大^{おお}きな実^みがなるんですよ。このかきの木^きをもらつたんだけど、どこへ植^うえたらいいですか。」と、賢^{けん}吉^{きち}は、父^{ちち}に、かきの木^きの子^こを見^みせるようにして、聞^ききました。

「なんだ、そんなことと呼^よんだのか。」といいながら、父^{ちち}親^{おや}は、一^{ひと}目^めそれを見^みました。そして、あきれたというふうで、

「根^ねがないじゃないか。人^{ひと}の捨^すてたものをもらつてくるばかりがあるか。」といいました。

「僕^{ぼく}、よく植^うえたら、つくような気^きがするし、枯^からすのはかわいそうと思^{おも}つたんだよ。」と、賢^{けん}吉^{きち}は、弁^{べん}解^{かい}しました。

「それには、時^じ節^{せつ}がわるい。そんなことがわからなくてどうする

。「と、父親ちちおやは、不興ふきようげにいつて、かえつて、賢吉けんきちは、しかられたのであります。父親ちちおやは、そのままどうせよともいわずに奥おくへ入はいつてしまいました。

「このかきの木きを、清せいちゃんに返かえそうか？」

考かんがえれば、賢吉けんきちには、そんなことはできませんでした。

「いつそ、捨すててしまおうかしらん。」

そうも思おもつたが、いきいきとしている木きを見ると、まだ命いのちがあるものを、みすみす枯からすことはなおさらできませんでした。また、最初さいしょから、助たすけてみようという気きがあればこそ、もらつて歸かえつたのですから、

「ほんとうに、お父とうさんのおつしやつたように、時節じせつがわるいの

だ。こんなに暑あつくなつたので、すぐ根ねが乾かわいて、枯かれるかもしれ
ない。」

彼は、前まえの畑はたけをあちら、こちら、歩あるきまわつて、なるたけ日ひの
当あたらない、涼すずしい、湿しつ気けのある場ば所しょを探さがしました。そして、そ
こへ丁てい寧ねいに植うえてやりました。それから、根ね本もとへたくさん水みずを
かけてやりました。けれど、後あとでいつてみたら、いつのまにか、
木きの頭あたまは、力ちからなくぐんなりと垂たれて、ついでに葉はが、みんなし
おれていました。

その明あくる日ひから、彼かれは、この木きを生いかすために、毎まい日にち水みずを
与あたえることを怠おこたらなかつたのです。そして、とうとう五ねん年めの今き
日よう、この木きは、花はなを咲さいてから実みを結むすんだのでした。

「いつか、お父さんが枯れるといったかきの木が、三つ実をつけて、大きくなりましたよ。」と、賢吉は、父に向かつて、いいました。けれど、お父さんは、もう、あのときのことを覚えていませんでした。賢吉は、なんとなく、さびしい気がしたので、けれど、神さまだけは、知っていてくださって、

「おおよくした。なんでも真心をつくせば、助からぬものでも助かる。」と、いわれるごとくに、かきの葉は、いま、風に吹かれながらいきいきとして円い実とともに光っていました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 12」講談社

1977（昭和52）年10月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第5刷発行

底本の親本：「日本の子供」文昭社

1938（昭和13）年12月

※表題は底本では、「僕《ぼく》のかきの木《き》」となつて
います。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年9月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

僕のかきの木

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>